

行政と芸術の関わり方を考えるための参考資料

2020年2月3日

作成者: 田中由紀子

1)「芸術における「アームズ・レングスの原則」「金は出すが口は出さない」の意味するところは何か」を考えるにあたって

■「アームズ・レングスの原則」とは

文化行政において芸術の自由と独立性を保つために、行政が一定の距離を保ち、援助をしながらも表現の自由と独立性を維持するという、支援する側と支援される側との関係性を示す言葉であり、1946年に設立されたイギリスのアーツ・カウンシルの行動理念(であり、政策ではない)。腕が短すぎると行政の介入過多となり、長すぎると行政が文化芸術を支援する理由が担保できなくなる。

今日の英国では、文化芸術団体に国から巨額な支援がなされているが、支援は国が直接するのではなく、文化・メディア・スポーツ省傘下の独立組織であるアーツ・カウンシルと、海外の交流を促進することで海外における英国の文化芸術の振興を図る、外務省傘下の独立組織であるブリティッシュ・カウンシルが直接の支援を行っている。

■行政が文化芸術を支援する理由

文化経済学の観点で行政が文化芸術に支援する主な理由は

- ①文化遺産説:文化遺産として後世に残すべきものを継承
- ②地域アイデンティティ説:芸術が市民に威信をもたらす
- ③地域経済波及説:芸術が観光資源となり便益をもたらす
- ④一般教養説:教養としての芸術が社会に利益をもたらす
- ⑤社会批判機能:社会批判機能としての社会への便益
- ⑥イノベーション説:芸術を通じた社会実験の成果が、社会に便益をもたらす可能性がある
- ⑦オプション価値説:現時点の評価からはわからない将来性への公共の支援

文化芸術は準公共財的特徴があり、私的財と公共財の中間にあり、市場のメカニズムに任せておくと十分な供給がされない可能性から、公共がサポートするという考えから支援が行われている。

2)「館長の権限で許可を出さなかった事例はどのようなものがあるか」を考えるにあたって

■芸術との行政との関係、支援のあり方について問題になった事例

リチャード・セラ《傾いた弧》論争(1981年)

GSA(General Services Administration=公共事業局)の依頼で、ニューヨークの連邦プラザに設置された《傾いた弧》(高さ3.7m、長さ37m、厚さ6cm強のゆるいカーブを描く巨大な鉄板を、ほんの少し傾斜させて広場に置いた作品)に対し、倒れてきそうな恐怖感を与え、視界や通行の障害になると、一人の裁判官が撤去を求めるキャンペーンをニューヨーク・タイムズ紙も巻き込んで行った。これを受けて、GSAは自らが依頼したにもかかわらず撤去やむなしと判断し、他所への移動を作家に勧告したが、セラは拒否。メディアを巻き込む論争に発展し、裁判所にもち込まれたものの、1989年に政府の決定により撤去された。

富山県立近代美術館問題(1986年)

「86 富山の美術」展に大浦信行が、縄文時代と現代とを往還する意図のもと、昭和天皇の写真と女性のヌード画像を並置した構図の連作コラージュ《遠近を抱えて》を出品。会期終了後に同作品を購入した美術館に対し、県会議員から「県民の感情からして不快」と異議が申し立てられ、右翼団体の街頭宣伝車が美術館に押し寄せる騒動へ発展。美術館は同作品の公開を中止し、93年に売却と展覧会カタログの焼却処分を実施。これを受けて、大浦は県と美術館に対して訴訟を起こし、作家の「表現の自由」と観客の「鑑賞する権利」が争点となったが、最高裁判所上告審(2000年10月27日)で大浦側の全面敗訴が確定。

ロバート・メイプルソープ回顧展中止(1990年)

1989年6月ワシントンD.C.のコーコラン美術館でロバート・メイプルソープ回顧展が開催直前に中止となった。この展覧会は全米芸術基金(National Endowment for the Arts、以下NEA)から直接的な助成を受けてはいなかったが、多様なセクシュアリティをめぐる作品へのNEAの支援が保守派に批判されている中、露骨な同性愛的性表現を含む作品展示が懸念された結果だった。しかし他の作家から中止決定はNEAの指示ではという声が浮上。同館とNEAは「政治的なものではない」と弁明したが、館外では検閲行為に対する大規模な抗議活動が行われ、職員辞職や同館での展覧会をボイコットする作家が続出し、担当キュレーターは1989年9月に、館長は同年12月に辞任した。

■展示中止となった近年の事例

横浜美術館での企画グループ展の出展作の直前展示中止(2004年)

2004年7月横浜美術館「ノンセクト・ラジカル 現代の写真 III」において、高嶺格の映像作品《木村さん》が展覧会開始直前に展示取りやめとなり、展示予定場所に館長名で「高嶺格氏の作品「木村さん」については、本展にふさわしい作品として公開の努力をしまいましたが、現在の日本では、上映が法に触れる恐れがあると判断しましたので中止いたします。来館者並びに関係者には大変ご迷惑をおかけしました。横浜美術館長雪山行二」と掲示された。これは、森永ヒ素ミルク事件による一級障害の男性を介護しながら撮影したドキュメンタリー映像で、性的な介護の模様も含まれていたため、上映対象に自主規制を加える予定での上映を館長も承認していたが、警察から「わいせつにあたる可能性」を指摘されたことを受け、館長判断で「公立館での展示として相応しくない」として展示取り止めとなった。

広島市現代美術館「Chim↑Pom」展開催延期(2008年)

広島市現代美術館での展覧会を準備していた美術家集団 Chim↑Pom が、映像作品の制作中に飛行機を使い「ピカッ」と読める文字を広島市上空に描き出したところ、これが地元新聞社によって取り上げられ、報道が過熱し、謝罪会見にまで発展。予定されていた展覧会が取り止めになった。平和を訴える作品として原爆を意味する言葉を表現したという制作意図ではあったが、市民や被爆者からは「不快だ」「気持ち悪い」といった声が上がった。制作現場に同館学芸員が立ち会っていたことに対して、原田康夫館長は「学芸員が知っていながら止めなかった。おわびしたい」と陳謝。Chim↑Pom から展覧会の自粛が提案され、取りやめとなった。

「遠近を抱えて」沖縄展展示中止(2009年)

2009年4月、沖縄県立博物館・美術館主催「アトミックサンシャインの中へ 憲法第九条下における戦後美術」展において、大浦信行の連作版画《遠近を抱えて》が企画段階で主催者より展示を拒否された。展覧会は外部のキュレーターの企画で、2箇所の私立スペースを巡回したが、大浦作品は富山県立近代美術館問題から「公立館での展示として相応しくない」と牧野浩隆館長がキュレーターに展示中止を求め、展示されなかった。館長は「これまでのニューヨークと東京での展示は民間のギャラリーであり、公共の美術館とは違う」「県立博物館／美術館は条例により、展示物に教育的配慮が求められて」おり、「(天皇制への賛否がある中)バランスを欠いたものを公的機関が支援できない。外した作品には裸体や入れ墨もあり、県教育委員会の下にある公的機関として相応しくないと判断した」と述べた。